JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	作ることと考えること
Author(s)	大橋，良介
Citation	年次学術大会講演要旨集，11: 318-320
Issue Date	1996-10-31
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5532
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	シンポジウム

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

シンポジウム

作ることと考えること

大橋良介（京都工芸繊維大学工芸学部）

1　哲学は科学技術の何を解明し、何を支えられるか

科学技術は大きなスケールで近代の人間の生活をその深層に到るまで支配している。その進歩の軌道から脱落することは、個人であると国家であるとを問わず「近代」という時代からの脱落を意味する。その進歩は科学および技術の専門家によって支えられている。そしてこれら専門家たちは、門外漢を必要としていない。科学技術に疎い哲学者もまた、科学技術の進歩に役に立つことはない。

それでは私は本日のシンポジウムで何を話すことが出来るか。これは私個人の問いであるが、同時にこの学会のテーマそのものにかかわる問いでもある。すなわち、哲学は科学技術の何を解明し、何を支えられるか、という問いである。

この問いの焦点をしぼる上で、科学技術がそれ自身ではどのような問題に直面しているかを、まず確認しておきたい。すでに陳腐なまでに指摘されてきたことであるが、科学技術は人間の生活を向上させてきたとともに、他方でその発達は人間に深い懐疑と不安をも与えてきた。二度にわたる世界大戦に示された近代兵器の脅威、平和であっても産業の高度化そのものが招く地球環境破壊、そして臓器移植やバイオテクノロジーや情報の高度化が招く倫理的・宗教的諸問題、等がその直接の引きがねである。これら直接の引きがねが与えられる以前にも、人間は本能的に「知る」ことを欲し「建てる」ことを喜びつつ、直観的にそれを恐れる面もあったことを（『旧約聖書』参照）、指摘しておきたい。

ここで大きく分けてふたつの考え方がある。ひとつは、科学技術が引き起こした問題は科学技術がみずからコントロールし解決することができるという考え方。もうひとつは、これらの問題は結局は科学技術を用いる人間の心の持ち方次第だという考え。哲学は直接に科学技術を支えたりすることは出来ないが、こういった科学技術の本質やその歴史、あるいは方向づけや限界等を考えるにあたって、おそらく伝統的な哲学思想を基盤としつつ多少の寄与をなす義務と役割とがあるであろう。そこで上のふたつの考えをまず検討したい。

2　科学技術の「本性」は科学技術的に解明できるか

科学技術が引き起こした問題は科学技術がみずからコントロールし解決することができるだろうか。すでに、上に指摘した問題状況がひとつのサジェッションとなっている。すなわち医療技術やバイオテクノロジーや情報の高度化等が招く環境倫理的・宗教的諸問題は、単なる科学技術上の問題ではなくなっている。それは社会システムや法律の問題であり、文化や宗教の問題である。さらに本質的な点は、科学技術がどこまでその「研究対象」や「課題」を解明しても、科学技術それ自身の本性を究明はしない、ということである。それはちょうど、強力なサーチライトが自分以外のものは明るく照らしても、自分自身は照らさないことと似ている。それではサーチライトそのものとは何であり、それはどのように照らすことができるのか。西欧の科学技術思想のいくつかに触れながら、この問題を考えていく必要がある。とりわけハイデッガーの技術思想が重要と考えられる。

3　科学技術の問題は科学技術を用いる人間の心の問題に還元できるか

別の考え方は、科学技術の問題が科学技術を用いる人間の心の問題に還元できるとみなすものである。たしかに科学技術が引き起こした問題は科学技術上の問題ではなくなって、社会システムや法律や文化や宗教の問題であり、広い意味での人間の心の問題になっている。また、科学技術を推進しているのは人間である。しかしだからといって、科学技術の問題は科学技術を用いる人間次第と言えるだろうか。この考え方は、人間自身が科学技術に深く支配され変容されてきたということを見逃している。科学技術の「本性」は、人間が心の持ち方を少し変えたら変化するというものではなくて、世界文明の命運とともに捉えられ、西欧思想の歴史的過程とひとつに生じた、「世界史的」と言ってよい必然性を有している。その命運は「神」や「ニヒリズム」等の問題として、現代を覆っている。こういう「世界史的」な問題視野のなかではじめて、「科学技術の推進とそれを支える思想に」も、根本的な仕方で追求できるであろう。

4　「無の思想」の新しい展開

どういう思想がいま、たとえ単なる輪郭ないし萌芽にすぎないとしても、提示され得るだろうか。ヒントは、現代の科学技術の状況とむすびついた「神」ある

いは「ニヒリズム」等の問題そのものにある。すなわち、科学技術としてあらわれた「虚無」を、すべてを飲み込み滅ぼす深淵としてでなく、一切がそこから生じる根源的な深淵として自覚しなおす「無の思想」である。

この思想は、ギリシア以来の西欧思想をくぐり抜けることを必要とする。しかしこの西欧思想と根本的な対決を行ない得るような別の思想伝統を持つであろう。西田哲学の「場所」の思想とその「技術論」（昭和１４年）をそのような思想の先駆と見ることができる。ただ、それは先駆であって、そのまま今日の状況への答えとはならない。現代の科学理論（システム理論、生命理論、カオスやゆらぎやファジー等の理論）やテクノロジー（コンピューター・ネットワークやバーチャル・リアリティ、バイオ、核融合、等）の新しい局面で、新しい展開が要求されている。その課題は到底、私ひとりの手に負えるものではないが、少なくともその展望を素描して、識者の教えを乞うことはできるであろう。